令 和 6 年 度 事 業 報 告 書

東京都目黒区下目黒 4 丁目 1 番 1 号

公益財団法人 目 黒 寄 生 虫 館

はじめに

当法人の掲げる目的は、寄生虫学の研究等事業と普及啓発事業を通じて、寄生虫学の発展に寄与することにある。研究等事業では各分野の研究活動や、他機関と連携を図って様々な共同研究を行っている。普及啓発事業では研究博物館「目黒寄生虫館」を運営し、広く一般に向けて寄生虫学の興味関心を高めている。特に当年度は文化庁からの呼びかけに応じて新規のイベントをいくつか開催した。期中には文化庁より「認定博物館等マーク」が授与されたが、現在は5年間の移行期間中にあり、“みなし登録博物館”として受領したものである。改めて改正博物館法に基づく登録を受けるため、目下申請資料の取りまとめにかかっている。なお、新法では新たに博物館に文化施設としての役割を与えている。当法人が博物館活動を通じて広く社会貢献を行うことのひとつに、文化観光の推進が挙げられる。観光庁では「観光施設における心のバリアフリー認定制度」を設けており、その対象施設に博物館が加わった。これらに積極的な姿勢を示すことで、今後さらに博物館の価値を高めてゆく。当年度に実施された事業について、以下の通り報告する。

研究等事業（定款第4条第1号事業）

当該事業では、寄生虫の形態分類学を主体とし、遺伝子解析を含めた研究活動を行った。成果は各学会大会で報告し、論文を発表した。また、標本・文献・論文別刷・過去の研究者の遺した歴史的資料等の学術資料は、適切に保管・管理するとともに、公開に向けたデジタルアーカイブ化を進めている。公開の必要性とは、博物館が単なる保存の場ではないことに起因する。資料の利活用を促すことによる社会全体の活性化と、後世における研究の発展に貢献するものである。さらに、培った専門知識をもとに広く一般に向けて助言・指導を行うほか、学会の委員会の参加や論文の査読など多岐にわたる分野で専門性の高い事業活動を展開した。

I. 寄生虫学に関する研究・調査活動

1. 寄生虫学に関する研究

A. 論文

1) Kamegai, Sh. & K. Ogawa (2024): *Galactosomum nagasakiense* n. sp. (Digenea: Heterophyidae) from the black-tailed gull, *Larus crassirostris*, with a description of metacercariae from some marine fishes developing trematode whirling disease. Parasitology International, 103: 102944.

海産魚に吸虫性旋回病を引き起こす原因寄生虫のメタセルカリアを複数の発症魚の脳から、また、その成虫をウミネコの小腸から採集し、形態を記載し、*Galactosomum nagasakiense*と命名した。

2) Morales-Avila, J. R., S. Al Jufaili & K. Ogawa (2024): Morpho-molecular characterization and phylogenetic relationships of *Encotyllabe percussa* n. sp. (Monogenea: Capsalidae) from

the spangled emperor *Lethrinus nebulosus* (Teleostei, Lethrinidae). Systematic Parasitology 101: 69.

オマーン産の海産魚ハマフエフキの咽頭歯に寄生していた*Encotyllabe*属単生類の形態と遺伝子を解析した結果、新種*E. percussa*として記載した。

3) Nakano, T., E. Nishiyama & T. Takano (受理済): Co-occurrence of gastropods of the genus *Melanella* (Mollusca: Eulimidae) parasitizing the black sea cucumber *Holothuria leucospilota* in central Japan: Implications for their geographic distribution and parasitic ecology. Zoological Science.

和歌山県白浜町のニセクロナマコに、4種のセトモノガイ類が寄生することを報告した。日本各地で採集された同属貝類との形態的・遺伝的比較により、それら4種の地理的分布と利用可能な宿主を検討した。

4) Seo, H., E. Ansai, T. Sase, T. Saito, T. Takano, Y. Kojima & T. Waki (2024): Introduction of a snake trematode of the family Ochetosomatidae in eastern Japan. Parasitology International, 103: 102947.

関東地方に生息するヘビ類に、北米原産と考えられる*Ochetosoma*属吸虫の寄生を認めた。また淡水生巻貝のサカマキガイから同吸虫の幼虫が得られ、日本国内で生活環が成立していることが示唆された。

5) Takano, T. (受理済): *Sabinella kawatomii* n. sp. (Gastropoda: Eulimidae) parasitic on the cidarid sea urchin *Stereocidaris* sp.: first record of the genus from Japanese waters. Venus.

大分県佐伯市沖で得られたオオサマウニ科の一種に寄生していたハナゴウナ科貝類を新種*Sabinella kawatomii*として記載した。日本における*Sabinella*属の初記録であった。

6) Takano, T., N. Sata, T. Iwaki, R. Murata, J. Suzuki, Y. Kodo & K. Ogawa (2024): Anisakid larvae in the skipjack tuna *Katsuwonus pelamis* captured in Japanese waters: Two-year monitoring of infection levels after the outbreak of human anisakiasis in 2018. Parasitology International, 103: 102938.

2019年～2020年に漁獲されたカツオに寄生していたアニサキスの寄生率・強度ならびに種構成を報告した。*Anisakis berlandi*を、魚の筋肉内から初めて報告した。

7) Yamamoto, D., T. Takano & S. Kojima (2025): Morphology and phylogenetic relationships of cryptoniscus larvae (Epicaridea, Isopoda, Cryptoniscoidea) parasitising amphipods from the abyssal and hadal depths of the Japan Trench. Marine Biodiversity, 55: 34.

日本海溝の深海帯および超深海帯から得られたヨコエビ類に寄生していたCryptoniscoidea上科等脚類の幼生の形態と遺伝子情報を報告した。少なくとも3種が含まれると推定された。

B. 学会発表等

1) 後藤 龍太郎，佐藤 大義，邉見 由美，髙野 剛史，杉山 高大，伊谷 行：テッポウエビ類の巣穴に共生するウロコガイ科二枚貝類の多様性と進化．日本貝類学会令和6年度大会，大阪府大阪

市（大阪市立自然史博物館），2024年4月.
日本とニューカレドニアにおいて、テッポウエビ類の巣穴に共生するウロコガイ科二枚貝類の多様性を調べ、各種の系統的位置を検討した。

2) 後藤 龍太郎，佐藤 大義，邉見 由美，髙野 剛史，杉山 高大，伊谷 行：テッポウエビ類に巣穴共生するウロコガイ科二枚貝類の起源・進化・多様性．2024年日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会，島根県松江市（島根大学松江キャンパス），2024年9月.
日本とニューカレドニアにおいて、テッポウエビ類の巣穴に共生するウロコガイ科二枚貝類の多様性を検討し、共通種の有無や遺伝的交流の可能性を考察した。各種の系統的位置を決定し、近縁種の生態と比較した結果、テッポウエビとの共生関係は複数回進化したと考えられた。

3) Goto, R., T. Sato, Y. Henmi, T. Takano, T. Sugiyama & G. Itani: Diving into the shrimp hole: The hidden diversity and evolution of commensal galeommatid bivalves dwelling in snapping shrimp burrows. The 5th Asian Marine Biology Symposium, Bangkok, Thailand (Emerald Hotel), Oct. 2024.
インド西太平洋域におけるテッポウエビ類の巣穴に共生するウロコガイ科二枚貝類の多様性を報告した。

4) Goto, R., T. Sato, Y. Henmi, T. Takano, T. Sugiyama & G. Itani: Living inside snapping shrimp burrows: diversity and phylogenetic positions of bivalves commensal with alpheid shrimps in the family Galeommatidae. Molluscs on the Edge (Molluscs 2024), Perth, Australia (State Library of Western Australia), Nov. 2024.
インド西太平洋域における、テッポウエビ類の巣穴に共生するウロコガイ科二枚貝類の多様性を報告するとともに、それらの系統的位置を検討した。この巣穴共生性は独立に少なくとも3回獲得されたことが示唆された。

5) 長谷川 和範，髙野 剛史：新たな日本海固有腹足類：イソチドリ科の1未記載種について．日本貝類学会令和6年度大会，大阪府大阪市（大阪市立自然史博物館），2024年4月.
日本海において深海性二枚貝オオキララガイに寄生する、イソチドリ科巻貝の形態を報告した。本種は日本海固有種の可能性が高いと考えられる。

6) Huo, S., N. Yumura, Y. Nishida, K. Tomikawa, K. Wakabayashi, H. Kawakami, H. Yamashita, S. Shirakashi, Y. Kondo, S. Ohtsuka, M. Nishibori, T. Yonezawa & K. Ogawa: The occurrence of *Caligus sclerotinosus* (Copepoda: Siphonostomatoida) in Japan: native or non-indigenous? 15th International Conference on Copepoda, Hiroshima, Japan（広島国際会議場），Jun. 2024.
オーストラリアのゴウシュウマダイから報告されたカイアシ類*Caligus sclerotinosus*は日本のマダイにも寄生する。本種がオーストラリアからの外来種か、日本にもともとの在来種かを日本における分布や遺伝子解析によって検討した。

7) 狩野 泰則，浅田 要，福森 啓晶，佐藤 宏樹，石山 玄樹，髙野 剛史，Franziska Bergmeier,

Bastian Brenzinger，Manuel Malaquias，矢萩 拓也，小島 茂明：日本海溝・千島海溝の貝類相から探る超深海動物の多様性とその創出機構．日本貝類学会令和6年度大会，大阪府大阪市（大阪市立自然史博物館），2024年4月．

日本海溝および千島海溝の深海帯・超深海帯生物相調査で得られた貝類の全体像を発表した。各調査地点での種構成と個体数から、それぞれの種の分布には水深が影響していることが示唆された。

8) 狩野 泰則，浅田 要，福森 啓晶，佐藤 宏樹，石山 玄樹，髙野 剛史，Franziska Bergmeier, Bastian Brenzinger，Manuel Malaquias，矢萩 拓也，小島 茂明：千島・日本海溝の貝類相概観．東京大学大気海洋研究所 共同利用シンポジウム「北西太平洋の深海生物相　白鳳丸KH22-8、23-5次航海の成果を中心に」，2025年2月．

日本海溝および千島海溝の深海帯・超深海帯生物相調査で得られた貝類の種数、個体数および海溝内での出現傾向を総括した。

9) 倉持 利明，髙野 剛史：皇居東御苑天神濠で捕獲されたナマズから得られたCaryophyllidea目条虫について（改：皇居東御苑天神濠で捕獲されたナマズの胃から得られた自由生活性ヒル類、シマイシビル*Erpobdella japonica*（環形動物門、環帯綱、ヒル亜綱、吻無蛭目、イシビル科）について）．第94回日本寄生虫学会大会，大阪府吹田市（大阪大学吹田キャンパス），2025年3月．

ナマズの胃から大型で扁平な虫体が多数得られた。形態観察と18S rDNAの塩基配列から、これらはナマズが餌として捕食したシマイシビルであることが解った。

10) 倉持 利明，石河 晃，吉濱 絵理，髙野 剛史，佐田 直也，巖城 隆：数十年の経過を経て発症した孤虫症の1症例．第83回日本寄生虫学会東日本支部大会・第75回日本衛生動物学会東日本支部大会合同大会，東京都文京区（東京大学弥生キャンパス），2024年10月．

東邦大学医療センター大森病院から相談を受けた症例を精査した。形態的には裂頭条虫幼虫と判断されたので、*cox1*遺伝子の部分配列を解析し、マンソン孤虫症と確定診断した。患者の凜告から、本症例は数十年前に摂取した幼条虫による孤虫症と考えられた。

11) Ogawa, K., S. Shirakashi & Y. Sugihara: Blood fluke infections of marine fish cultured in Japan. Trematodes 2024, Brisbane, Australia (Queensland Museum), Sep. 2024.

日本の養殖海産魚に寄生する住血吸虫は10を超える種が知られているが、生活環が解明されているのはクロマグロに寄生する2種のみで、養殖場内で生活環が完結していることなどを概説した。

12) 佐々木 瑞希，巖城 隆，黒住 耐二，脇 司，福本 晋也，倉持 利明：2023年および2024年に関東にて発見された*Leucochloridium*属吸虫．第94回日本寄生虫学会大会，大阪府吹田市（大阪大学吹田キャンパス），2025年3月．

千葉県と東京都で採集された*Leucochloridium*属吸虫の幼虫について、ブロードサックの色彩とミトコンドリア*cox1*遺伝子の塩基配列から検討した。千葉県産のものは、*L. subtilis*に近いが相同性は低く新規の配列であり、東京都産のものは、岩手県産の*L.* sp.と高い相同性を示した。

13) Shirakashi, S., Y. Sugihara, R. Iwasaki, H. Miyazaki, N. Itoh, T. Nakano, T. Takano & K. Ogawa: Discovery of *Galactosomum* spp. cercariae from *Cerithium dialeucum* and complete

elucidation of the life cycle of the species causing whirling disease in marine fish. Trematodes 2024, Brisbane, Australia (Queensland Museum), Sep. 2024.

長崎県で採集したコベルトカニモリから*Galactosomum*属3種のセルカリアを得た。うち1種は養殖魚に多大な影響を与える吸虫性旋回病の原因虫であった。

14) 杉原 志貴，上野 睦夫，白樫 正，小川 和夫：ブリ筋肉線虫の宿主体内における寄生の経時的変化．令和7年度日本魚病学会春季大会，東京都文京区（東京大学弥生キャンパス），2025年3月．

天然の大型ブリ120尾を1年半にわたり飼育して、ブリ筋肉線虫の寄生状況を経時的に調べた。ブリ体内に1年半以上寄生し、夏にふ化幼生を体外に放出すると考えられた。

15) 髙野 剛史：5000 m 以深に生息する魚類から得られた内部寄生虫の多様性．東京大学大気海洋研究所 共同利用シンポジウム「北西太平洋の深海生物相　白鳳丸KH22-8、23-5次航海の成果を中心に」，2025年2月．

日本海溝および千島海溝の深海帯以深から得られた魚類の寄生蠕虫相を調査し、得られた吸虫・条虫・線虫・鉤頭虫の9種を報告した。

16) Takano, T., M. Hasegawa-Takano, K. Inoue & T. Nakano: Diversity of eulimid gastropods parasitizing the black sea cucumbers *Holothuria atra* and *H. leucospilota* in the West Pacific. The 5th Asian Marine Biology Symposium, Bangkok, Thailand (Emerald Hotel), Oct. 2024.

西太平洋域において、潮間帯で多産するクロナマコとニセクロナマコに寄生しているハナゴウナ科貝類の多様性を殻形態と遺伝子情報により検討した。前者には3属8種、後者には1属5種が寄生していた。

17) 髙野 剛史，亀井 遥香，倉持 利明，小島 茂明：北西太平洋の超深海性クサウオ科魚類から得られた吸虫の形態と系統的位置．第94回日本寄生虫学会大会，大阪府吹田市（大阪大学吹田キャンパス），2025年3月．

日本海溝および千島海溝の超深海帯に生息するクサウオ科魚類より、*Steringophorus*属吸虫の未記載種を得たため、形態と系統的位置を報告した。超深海性魚類から内部寄生虫の初記録となる。

18) 髙野 剛史，小川 晟人，長谷川 万純，伊藤 萌：千島および日本海溝の深海・超深海性ナマコ類から得られたハナゴウナ科腹足類．日本貝類学会令和6年度大会，大阪府大阪市（大阪市立自然史博物館），2024年4月．

千島海溝および日本海溝の深海・超深海生物相調査で得られたナマコ類約4900個体を解剖し、得られた寄生性貝類5種について報告した。

19) Takeuchi, D., S. Shirakashi, Y. Sugihara, R. Iwasaki, H. Miyazaki, N. Itoh, T. Nakano, T. Takano & K. Ogawa: Experimental reproduction of the trematode whirling disease caused by *Galactosomum nagasakiense*. XI International Symposium on Fish Parasites, Mérida, Mexico (Centro Cultural Universitario, Universidad Autónoma de Yucatán), Jan. 2025.

*Galactosomum nagasakiense*のセルカリアを海産魚の稚魚に実験感染させ、吸虫性旋回病が

再現されるまでの時間や魚種を検討した。

20) 竹内 大起，白樫 正，杉原 志貴，岩﨑 亮磨，伊藤 直樹，小川 和夫，髙野 剛史，中野 智之：吸虫性旋回病原因寄生虫*Galactosomum* sp.の実験的感染．令和6年度日本魚病学会秋季大会，東京都武蔵野市（日本獣医生命科学大学），2024年9月．

吸虫性旋回病を引き起こす*Galactosomum nagasakiense*のセルカリアを魚類に実験感染させる手法を複数検討し、手法と魚種による成功率（寄生率）の違いについて発表した。

21) 竹内 大起，白樫 正，杉原 志貴，岩﨑 亮磨，伊藤 直樹，小川 和夫，髙野 剛史，中野 智之：吸虫性旋回病原因虫*Galactosomum nagasakiense*幼虫の行動特性および寄生動態．令和7年度日本魚病学会春季大会，東京都文京区（東京大学弥生キャンパス），2025年3月．

吸虫性旋回病を引き起こす*Galactosomum nagasakiense*のセルカリアの中間宿主貝内での発育状況とその条件や水中での遊泳行動を調べ、魚体内での移動経路を推定した。

22) Tomita, Y., S. Shirakashi, N. Hattori & K. Ogawa: Reducing skin fluke infection using fish that consume eggs. XI International Symposium on Fish Parasites, Mérida, Mexico (Centro Cultural Universitario, Universidad Autónoma de Yucatán), Jan. 2025.

海産養殖魚の生簀網上に蓄積するハダムシ類の虫卵が養殖魚に寄生するハダムシの発生源となっている。生簀網上の虫卵を摂食する魚類としてアイゴとメジナが適していた。

23) 冨田 雄貴，白樫 正，服部 亘宏，小川 和夫：虫卵を摂食する魚類を用いたハダムシ防除法の実用性の検討．令和7年度日本魚病学会春季大会，東京都文京区（東京大学弥生キャンパス），2025年3月．

海産養殖魚に寄生するハダムシの発生源となる生簀網上に蓄積する虫卵を摂食する魚類としてアイゴとメジナを長期間飼育し、養殖魚と虫卵摂食魚の混養による虫卵除去効果や給餌量への影響も調べた。

24) 矢萩 拓也，芦田 将成，石山 玄樹，髙野 剛史，福森 啓晶，浅田 要，小島 茂明，狩野 泰則：深海カメラ動画解析によるトロール曳網手法の改善．東京大学大気海洋研究所 共同利用シンポジウム「北西太平洋の深海生物相　白鳳丸KH22-8、23-5次航海の成果を中心に」，2025年2月．

深海カメラの映像を参考に、ワイヤー長や曳網スピードなどを調整し、最適なトロール調査手法を検討した。

25) 山本 大貴，髙野 剛史，小島 茂明：The deepest Podasconidae (Cryptoniscoidea, Epicaridea) from the Japan Trench．2024年日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会，島根県松江市（島根大学松江キャンパス），2024年9月．

日本海溝の深海帯および超深海帯から得られたヨコエビ類に寄生していた等脚類幼生の形態と遺伝子情報を報告した。Podasconidae科等脚類が含まれると考えられ、同科の最深サンプルとなった。

C. 著書・その他

1) 巖城 隆（2024）：目黒寄生虫館に展示されている寄生虫㉑ヒトジラミ．クリンネス，469（2024年12月号）：27.

ヒトに寄生するシラミ類の説明と、アタマジラミとコロモジラミの分岐、および人類の進化の歴史との関係について解説した。

2) 倉持 利明（2024）：寄生虫を専門に展示する「目黒寄生虫館」．クリンネス，464（2024年7月号）：26.

目黒寄生虫館の活動、成り立ち、展示、運営等について紹介した。

3) 倉持 利明（2024）：目黒寄生虫館．落合 智子（監修），中島 憲一郎，宇都 拓洋，永藤 欣久，松村 紀明，三宅 克典（編），医歯薬学系博物館辞典 増補改訂版，p. 29．雄山閣，東京.

目黒寄生虫館の沿革、展示の概要、研究の特色等について解説、紹介した。

4) 倉持 利明（2024）：第11章 土壌伝播蠕虫感染症．汚染された土壌がもたらす回虫症・鉤虫症・鞭虫症．飯島 渉，磯谷 正行，井上 弘樹，古澤 美穂（編著），感染症で学ぶ日本と世界の歴史：医学・歴史学とつむぐ歴史総合，pp. 194-197．清水書院，東京.

土壌伝播蠕虫類3種について、形態、生活史、ヒトへの感染経路などを解説した。

5) 佐田 直也（2024）：ギョウチュウの仲間について．クリンネス，465（2024年8月号）：20.

ギョウチュウ類の形態的及び生態的特徴と、*Gyrinicola*というオタマジャクシを宿主とする珍しいギョウチュウについて解説した。

6) 髙野 剛史（2025）：寄生虫の寄生虫．クリンネス，470（2025年1月号）：18.

寄生虫に寄生する事象（超寄生）およびその生物種について解説した。

D. 研究助成

1）（独）日本学術振興会 学術研究助成基金助成金　2023～2026年度　若手研究

「寄生生物の移動能力は多様化パターンに影響するか？：ハナゴウナ科腹足類による検証（23K14257）」

（研究代表者 髙野 剛史）

今年度はリアルタイムPCRに用いるサンプル（カギモチクリムシ）のDNA抽出、および通常PCRによる増幅確認を行うとともに、ハナゴウナ科の複数属について個別に系統解析を行い、宿主や付着部位の変遷を明らかにした。また、沖縄島・奄美大島において調査を行い、系統解析ならびにX線μCT解析に用いる標本の収集・作製に努めた。加えて、ニセクロナマコに寄生するセトモノガイ類の多様性と付着部位、およびそれら貝類の地理的分布と宿主特異性について等、関連論文2編を執筆した。

2）（独）日本学術振興会 学術研究助成基金助成金　2022～2025年度　基盤研究（B）

「虫卵駆除生物を利用した単生虫病予防法の開発（22H02427）」

（研究分担者 小川 和夫）

当年度も引き続き海産魚の網生簀養殖で問題となる単生類のハダムシ類 *Benedenia* と

Neobenedenia 対策として、網生簀に付着する虫卵除去法の開発を目指した。虫卵を摂食し、養殖魚との混養可能で、給餌量への影響が少なく、市場価値が高い魚種としてアイゴとメジナを選定した。

2. 皇居の生物相調査（第Ⅲ期）への参加

（独）国立科学博物館 総合研究「過去 150 年の都市環境における生物相変遷に関する研究 －皇居を中心とした都心からの収集標本の解析」

当年度は5年間にわたる調査の4年度目にあたる。倉持館長をはじめ研究職員（髙野、佐田）ならびに小川名誉館長、脇 司博士（東邦大学理学部准教授）、吉川 夏彦博士（国立科学博物館研究員）を加えた6人体制で、貝類、魚類、両生爬虫類、哺乳類の寄生蠕虫調査チームとして参加した。当年度は4月22～25日、5月21～23日、7月9～11日、9月10～12日、10月4日、10月15～17日に、吹上御苑、道灌堀周辺に加えて東御苑、皇居外苑における調査を実施した。得られた寄生蠕虫と宿主は目黒寄生虫館等に持ち帰り、それぞれ形態学的、分子生物学的解析に供した。これまでの4か年で76種の動物から56種の寄生蠕虫・寄生性甲殻類・寄生性ダニ類を得た。結果の一部を学会発表1件として発表し、論文1報を投稿準備中である。

3. 第83回日本寄生虫学会東日本支部大会・第75回日本衛生動物学会東日本支部大会合同大会の共同主催

令和6年10月12～13日、東京大学・麻布大学とともに主催者として日本寄生虫学会東日本支部大会の運営に参加した。今回は日本衛生動物学会東日本支部大会との合同大会であり、倉持館長が三條場 千寿博士（東京大学准教授）、新倉 保博士（麻布大学教授）とともに共同の大会長を務めた。

また、本大会2日目には市民公開講座「顧みられない熱帯病（NTDs）の対策・制圧において人文学は何ができるか？」を実施した。これは（公財）サントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」研究グループ（倉持館長が参画）主催によるもので、目黒寄生虫館は感染症アーカイヴズ（代表：市川 智生博士（沖縄国際大学教授））と共に共催した。宮本 和子博士（山梨大学大学院教授）、佐々 美保博士（東京大学大学院特任研究員）、浜田 明範博士（東京大学大学院准教授）、平林 史子博士（特定非営利活動法人 DNDi Japan 理事）の4名を演者に招き、両学会員だけでなく多くの一般市民の参加を得ることができた。

Ⅱ. 学術資料の収集および管理

1. 学術資料の収集と貸出

当法人が所蔵する寄生虫・宿主標本は現在約60,000点である。研究員が研究・展示のために収集した標本に加え、外部研究者からの寄贈標本の整理およびデータベース登録を継続中である。当年度の標本寄贈は24件・6,710点であった。これらには角田 郁生博士（近畿大学医学部微生物学教室）の寄生虫学実習用スライド標本5,635点（松岡 裕之博士（元・自治医科大学）を介してご寄贈）、小山 浩一博士（元・北里大学医学部、現・同理学部）のネズミ鞭虫卵液浸標本、新井 明治博士（元・香川大学）の日本海裂頭条虫の液浸標本2点、向井 乾氏（帝京大学学生）の日本海裂頭条虫の液浸標本2点（採集は父、向井 将医師）などを含む。

外部研究者への標本貸出は3件・4点で、来館した研究者の標本閲覧は3件・233点、標本撮影依

頼は3件・11点であった。文献資料の貸出は3件・3点で、閲覧は1件・6点であった。他の博物館の展示協力等として標本6件・16点、資料5件・14点を貸し出した。

当法人が所蔵する寄生虫のタイプ標本は、当年度は13種・90点が追加された。一方、山口 左仲博士の線虫標本のうち、現状では観察が困難と考えられた標本23種・39点を所蔵タイプ標本一覧から除外した。そのため、タイプ標本の総数は令和7年3月末時点で1,327種・4,780点である。これらの詳細は「目黒寄生虫館所蔵タイプ標本一覧」として公式ウェブサイトで公開している。

2. 学術資料の整理

当法人では学術資料を適切に管理するため、常に資料整理とデータ化・アーカイブ化を進めている。

A. アーカイブの作成と公開

目黒寄生虫館公式ウェブサイトでは前述のタイプ標本の他に、複数のアーカイブを作成・公開している。刊行物では「日本における寄生虫学の研究（和文版／英文版）」「目黒寄生虫館研究報告」「目黒寄生虫館月報／ニュース」「むしはむしでもはらのむし通信」がある。寄生虫標本・文献に関するものでは「目黒寄生虫館所蔵タイプ標本一覧」「日本の哺乳類寄生蠕虫類リスト」「日本の鳥類寄生蠕虫類リスト」「山口 左仲博士の報告した日本の魚類・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類の寄生蠕虫類」がある。平成26年度以降の職員の研究業績の一覧は、研究員ブログのページから確認することができる。

当年度は令和4年度に引き続き、寄生虫蝋模型の3Dモデル「仁吉3D」を公開した。これは、当法人が所蔵する沼田 仁吉（北里研究所技術部職員（当時））作寄生虫蝋模型のうち新たに7点を、三次元データ化し再構築したもので、（一財）全国科学博物館振興財団による2024年度全国科学博物館活動等助成事業の助成を受けて行った。その結果、令和4年度に公開した11点と合わせて18点を公開したことになる。当法人公式ウェブサイトから外部サイトに移動して閲覧することができる。また同助成のもとで寄生虫卵の3Dレプリカを作成したが、これについては後述する。

B. 論文別刷等の整理と電子情報化

書庫に保管する論文別刷等は令和7年3月末時点で約43,000件であった。また、近年は研究者間ではPDFファイル形式での論文等のやり取りが主流となっており、入手したPDFファイル約7,700個を共用サーバー内に保管している。公式ウェブサイトでのこれら別刷等の一覧の公開を準備中である。

C. 図書・逐次刊行物の整理

1) 図書

購入または寄贈により、当年度に87冊の図書を新たに登録した。蔵書数は令和7年3月末時点で5,998冊となった。一例を以下に示す。

- 創立50周年記念出版：熱帯の感染症（公益財団法人大山健康財団、2024）
- 感染症でまなぶ日本と世界の歴史：医学・歴史学とつむぐ歴史総合（清水書院、2024）
- 無視されている古き友、寄生虫を思い出そう：大切な忘れ物の勉強（長崎文献社、2024）
- 死の貝 ー日本住血吸虫症との闘いー（新潮社、2024）

2) 逐次刊行物

当法人では、寄贈や会員購読により約340種類・13,800冊を所蔵している（休刊、廃刊を含む)。当年度は研究機関・学術団体から37種（3種の遺贈を含む)、博物館等の施設から42種の刊行物を受け入れた。それらの施設の一例を以下に示す（順不同)。

a) 研究報告、紀要等

日本熱帯医学会、日本展示学会、橿原市昆虫館、
日本有害生物研究会、観音崎自然博物館、法政大学　他

b) ニュースレター等

印刷博物館、鴨川シーワールド、埼玉県立自然の博物館、
のと海洋ふれあいセンター、姫路市立水族館、ペット未病研究会　他

D. その他資料の整理

大鶴 正満博士、山口 左仲博士、佐々 学博士等、および福間家代々の医学資料は当法人に寄贈され、国立感染症研究所が所蔵する小宮 義孝博士の資料と、慶應義塾大学医学部熱帯医学寄生虫学研究室の資料は寄託資料として管理している。これらの利活用と後世への継承のため、当年度も中性紙保存箱への移し替えや目録作成を通じて資料整理と公開に向けた作業を進めた。

また、寄生虫症を含む感染症にまつわる記録を整理して公開するプロジェクト「感染症アーカイヴズ」が運営するウェブサイトでは、本事業に関する当法人保管の資料目録が公開されている。令和7年3月27日にはプロジェクトの年次報告会が対面とオンラインのハイブリット方式で行われ、倉持館長と巖城研究室長が参加した。

Ⅲ. 寄生虫に関する助言および指導、外部研究者との連携協力等

寄生虫に関する質問等は来館者から59件、電話14件、手紙2件、電子メール2件、公式サイトのメールフォーム23件であった。法人から依頼された寄生虫・異物同定は1件であった。また、当法人が受入れを許可した研究生2名に対して指導・助言を行なった。

なお、職員は学会の委員等の社会貢献活動を行うことにより、研究活動の成果や調査研究に基づいた専門知識を広く発信して還元している。当年度の状況は以下の通りである。

1. 倉持 利明

・日本寄生虫学会 評議員（平成9年～）
・日本寄生虫学会 用語委員（平成16年～）
・寄生虫分類形態談話会 代表（平成9年～）
・日本獣医学会 評議員（令和6年～）
・公益財団法人藤原ナチュラルヒストリー振興財団 監事（平成25年～）
・東京家政大学 非常勤講師（平成26年～）＊博物館資料論／博物館資料保存論
・第83回日本寄生虫学会東日本支部大会・第75回日本衛生動物学会東日本支部大会合同大会
　合同大会長 実行委員（令和6年10月開催）

2. 巖城 隆

・日本寄生虫学会 評議員（平成28年～）
・第83回日本寄生虫学会東日本支部大会・第75回日本衛生動物学会東日本支部大会合同大会実行委員（令和6年10月開催）

3. 髙野 剛史
・日本貝類学会 ちりぼたん 編集委員（令和4年～）
・日本貝類学会 Venus 編集委員（令和5年～）
・日本貝類学会 若手の会 世話人（平成30年～）
・日本貝類学会 選挙管理委員（令和6年10月～令和7年3月）
・千葉大学 非常勤講師（令和6年）＊系統学特講B
・第83回日本寄生虫学会東日本支部大会・第75回日本衛生動物学会東日本支部大会合同大会実行委員（令和6年10月開催）

4. 佐田 直也
・Current Herpetology誌 Editorial board（令和6年～）
・第83回日本寄生虫学会東日本支部大会・第75回日本衛生動物学会東日本支部大会合同大会実行委員（令和6年10月開催）

5. 亀谷 誓一
・東京農工大学 非常勤講師（令和元年～）＊博物館経営論
・東京工芸大学 ゲスト講師（平成25年～）＊博物館実習

普及啓発事業（定款第4条第2号事業）

当法人が所有する建物の1階と2階を、展示室として無料で一般公開している。昭和28年に個人博物館として創設後、財団法人化を経て70年以上にわたり運営を続けてきた。寄生虫学に特化した博物館は世界的にも珍しく、中には「自分の国でも寄生虫の博物館を作るべきだ」と視察に来る海外の方もいる。「国内外から毎年5万人以上が訪れる」と公称してきたが、前年度に続き当年度の来観者も7万人に迫った。単年度の人気ではなかったことから、今後は公称を「年間6万人以上」と改める。さらに当年度は博物館業界全体の盛り上げのために文化庁から行事開催の呼びかけが複数行われ、いずれも積極的に参加した。その結果、各種のイベントを以前より頻繁に行うこととなった。また、刊行物やオリジナルグッズの製作などの幅広い活動を通じて寄生虫学の普及啓発に努めた。

Ⅰ.「目黒寄生虫館」の管理運営事業

1. 開館日数・来館者数など

当年度の開館日数は255日であった。年間来館者数は約68,770名で、1日平均270名であった。来館者数は従来の水準を大きく上回った前年度と比較してほぼ横ばいで、興味関心の高さが一時的なものではなかったことの証左といえる。とりわけインバウンド需要の高まりが顕著に見られ、これ

まで以上に展示解説の多言語化の拡充が求められた。QRコードを用いた展示解説を追加して約70カ所に設置し、8言語だった翻訳機能は3言語を追加して11言語まで対応可能となった。

団体・グループ見学は49の各種学校や市民団体等から申請があり、881名（全体の1.3%）が訪れた。コロナ禍を経て大人数の見学申し込みが減る傾向がみられ、修学旅行や課外学習などのグループ見学が申請の大半を占めた。

2. 常設展示の更新

A.「山口 左仲の論文原図・標本展示」の入れ替え

令和6年10月3日より、昭和12～13年に発表された、魚類に寄生する単生類に関する論文2編の図版の原図に入れ替えた。中央のアクリルケースには、山口博士が約90年前にキジハタの鰓から採集した単生類 *Epibdella*（*Benedenia*）*convoluta*（現在は *Allobenedenia convoluta* のシノニムとされる）のプレパラート標本や、掲載された論文の別刷を展示した。

B.「山口 左仲メダル」の展示

原図の入れ替えの際、隣接する展示コーナーにて「山口 左仲メダル」の展示を開始した。オーストラリアの吸虫類の研究グループが山口博士の功績を称えて当年度に創設したもので、吸虫類の分類学に著しく貢献した研究者に授与される。メダルに使われた山口博士の画像は当法人から提供した。また、劣化防止のため、同ケース内の「虎の巻」の開くページも変更した。

3. 取材対応など

当年度の取材申請は計 31 件で、そのうち 29 件を許可し、26 件に対応した。3 件は許可したものの、先方都合でキャンセルになった。申請件数は前年度より 14 件少なかったが、文化庁の特設ウェブサイトでの動画配信や NHK 制作ドラマへの資料提供など、反響の大きなものが多かった。メディアの内訳は、テレビ 10 件、新聞 3 件、ウェブサイト 4 件、書籍・雑誌 7 件、その他 2 件だった。申請内容のうち 9 件は資料や情報を提供するもので、15 件は博物館の紹介、その他の依頼は 2 件だった。

Ⅱ. 教育普及活動事業

1. 特別展示

A. 特別展「寄生虫の超能力」

（令和6年4月27日～9月23日）

寄生虫が間違えることなく特定の部位に寄生したり、宿主からの攻撃をかわしたり、宿主の行動を変化させたりするのは、人間からみればある意味で寄生虫のもつ「超能力」といえるのではないか。そのような切り口から、主に子どもを対象とした特別展を開催した。12種類の寄生虫をイラストで紹介し、アクリル板をめくるとそれぞれの特性がわかる仕組みのハンズオン展示手法を用いた。内容は東京大学の後藤 康之教授が代表を務める研究グループ「寄生虫が持つ高機能因子の同定とその利用」（寄生虫模倣）を原案とし、グループから寄生虫のイラストの提供を受けた。展示の隣にはボードと付箋を並べ、「ちょうのうりょくでなにつくる？」と問いかけた。来観者の自由なアイデアは両脇の壁に貼り出し、期間中に700以上の声が集まった。子ども

向けの展示や、付箋でコメントを求める双方向性の展示はいずれも初の試みである。来観者が一様に興味をもって参加したことは、今後の展示づくりに大いに参考となる結果となった。

なお、特別展の初日を目黒通りの商業イベント「目黒マルシェ」に重ねることで、当法人もこれに参画した。イベントのSNS等を通じて、特別展の告知につなげた。

B. ミニ特別展「東京都初記録 生体展示 ロイコクロリジウムの幼虫」

（令和6年7月21日～8月10日）

令和6年7月に東京都内の中学生がロイコクロリジウムの幼虫が寄生したオカモノアラガイを発見した。中学生の投稿したSNSが話題を呼び、目黒寄生虫館への寄贈と展示を提案いただいた。すみやかに連絡を取り準備を進め、巻貝を受領した日の午後から死亡するまでの約3週間にわたって展示した。東京都では初めての記録で、種を特定するため遺伝子解析等の共同研究を進め、その結果を第94回日本寄生虫学会大会（大阪府吹田市）で発表した。

C. 大学医学部の医動物学実習への参画：寄生虫卵3Dレプリカによる教育普及効果の検証

（令和6年11月8日、15日、18～19日）

先に述べたとおり、助成事業により「仁吉3D」の3Dデータをもとに寄生虫卵12種のレプリカを作成し、これらがもつ教育普及効果を検証した。東京科学大学（旧東京医科歯科大学）医学部の寄生虫学・熱帯医学分野教授、石野 智子博士のご厚意により、医動物学実習においてレプリカを医学科および保健衛生学科の学生に供覧していただいた。目黒寄生虫館からも倉持館長、巖城研究室長、髙野研究員が交代で出向いた。学生たちはレプリカを手に取り、三次元的に寄生虫卵を観察する様子が覗われた。教授以下スタッフからも好評で、既に次年度における同実習への参画の依頼を受けている。

D. 令和7年・巳年 干支コレクション「ヘビの寄生虫：シタムシ類」

（令和7年1月5日～2月2日）

令和7年は巳年であることから、ヘビの肺などに寄生する甲殻類の一群、シタムシ類の標本を4点選定して1階情報コーナーで1か月間展示した。モニターには宿主となるヘビの画像を自動再生で流し、食性や分布域等の特徴を紹介した。

これと合わせて、丹青社グループが運営するウェブサイト「アイエム [internet museum]」が行う「ミュージアム干支コレクションアワード2025」に参画した。これは各地の博物館・美術館が、干支に因んだその館ならではの作品を出展するオンラインイベントである。全国から集まった作品は、一般投票によりランキングが作られる。目黒寄生虫館は「シタムシの一種　アーミリファー・モニリフォルミス」を出展したところ、57作品中4位を獲得した。

E. 世界顧みられない熱帯病の日（1月30日） 特別写真展「顧みられない熱帯病と暮らす人びと」

（令和7年1月24日～3月30日）

毎年1月30日はWHO（世界保健機関）が定める「世界顧みられない熱帯病の日（World NTD Day）である。そこでNTDsの患者と家族、患者らのために尽力する医療従事者に焦点を当て、大小16枚のパネルとiPadから流れる動画から構成される写真展を開催した。

なお、本展示はDNDi（顧みられない病気の新薬開発イニシアティブ）との共催で、武田薬品工業株式会社が実施する「グローバルCSRプログラム」によって支援された、DNDiの「世界中

の最も顧みられない患者さんに治療を届けるプロジェクト」の一環として実施した。

2. 他館等への協力

以下の6団体から依頼を受け、資料の提供に応じた。

A. 厚木市・厚木愛甲獣医師会（神奈川県厚木市）

「小学生獣医師体験」

（令和6年8月22日）

犬糸状虫と犬回虫の標本を提供した。

B. 未来屋書店北戸田店（埼玉県戸田市）

「日本住血吸虫関連展示」（小林 照幸著「死の貝」文庫化記念イベント）

（令和6年8月24日～10月31日）

日本住血吸虫の画像、ミヤイリガイの乾燥標本、冊子「俺は寄生虫博士だ（山梨地方病研究部発行）」の複写画像、日本住血吸虫の生活史の解説画像、刊行物「むしはむしでもはらのむし通信」を提供した。

C. 東京大学大学院新領域創成科学研究科（千葉県柏市）

学生実習・講義（令和6年10月25～26日）、大学キャンパス一般公開（10月25～26日）

先端生命科学専攻多細胞生物システム学分野教授の菊地 泰生博士に、日本海裂頭条虫や肝蛭など標本計6点を貸出した。

D. 国立科学博物館（東京都台東区）

企画展「貝類展：人はなぜ貝に魅せられるのか」

（令和6年11月26日～令和7年3月2日）

クモヒトデヤドリニナなどの寄生巻貝の宿主付液浸標本3点と、ミヤイリガイが中間宿主となる日本住血吸虫症の紹介のために生活史の解説画像を提供した。

E. 大阪市立自然史博物館（大阪市東住吉区）

第55回特別展「貝に沼る −日本の貝類学研究300年史−」

（令和7年2月22日～5月6日）

ミヤイリガイが中間宿主となる日本住血吸虫症の紹介のための画像データ4点を貸出し、使用許諾の仲介をした。

F. 千葉県立中央博物館分館 海の博物館（千葉県勝浦市）

令和6年度マリンサイエンスギャラリー「超深海」

（令和7年2月22日～5月11日）

髙野研究員が千島海溝および日本海溝の超深海調査に参加した際に深海魚から得た寄生虫のスライド標本1点、液浸標本1点、画像7点を提供した。

3. 講演会など

A. 解説会ほか

1) 2024年「国際博物館の日」記念事業

毎年5月18日はICOM（国際博物館会議）が定める「国際博物館の日」である。毎年の共通テーマをもとに、活動に賛同する世界中の博物館等でこの日を中心に各種イベントが開催されている。当年度は文化庁からの呼びかけに応じて、以下2つの企画を実施した。

①ミニ解説会

（令和6年5月18～19日）

2日間にわたり1階展示室にて10～15分程度のミニ解説会を行った。各回20～35名程度が集まり、合計約120名が参加した。解説会の内容は以下の通りである。

5月18日 午前の部「深海の寄生虫」（髙野 剛史）

5月18日 午後の部「日本住血吸虫症と闘った人たち」（倉持 利明）

5月19日 午前の部「野外で寄生虫を探す」（佐田 直也）

5月19日 午後の部「寄生虫のなまえ」（巖城 隆）

②職員のイチ推し写真集

（令和6年5月11～26日）

1階展示室の情報コーナーのモニターを用いて、展示室ではあまり見られない日々の活動について、職員全員が個々に選んだ「イチ推し写真」を通じて紹介した。研究活動で得られた標本やサンプリング調査で訪れた場所、蔵書の登録風景や解説パネルの内側など、その内容は多岐に及んだ。

2) 「教員のための博物館の日 in 目黒寄生虫館」

（令和6年7月29日）

このイベントは平成20年に国立科学博物館が始めたもので、博物館にある学習資源の利活用のために教員に向けて様々なプログラムを提供している。当年度は全国の60以上の博物館が参加した。21館が初開催で、そのうちの1館が目黒寄生虫館である。イベントは休館日に実施し、午前午後の2回で計18名の教員が参加した。各回約2時間のプログラムで、展示室と収蔵庫のガイドツアー、アニサキスの採取体験、研究員たちとのディスカッションを行った。

一都三県から申し込みがあり、小・中・高、インターナショナルスクールなど多種多様な教員が参加した。その中の一校からは後日出前授業の依頼があり、倉持館長が対応した。

3)「こども霞が関見学デー」文化庁ブースへの出展

（令和6年8月7～8日）

28の府省庁が参加し、子どもたちを対象に業務説明や職場見学などを行うことで社会を知る機会をつくることを目的としたイベントで、前年度に続き文化庁からの依頼を受けて参加した。ブースは「夏休み博物館体験！～みんなが知らないディープな博物館の世界～」と題し、都内にある5館が各館の魅力を紹介した。所蔵標本11点を展示して解説を行ったほか、両日2尾のマサバを解剖し、内臓や筋肉から生きたアニサキスの幼虫を採取するデモンストレーションを行った。採れたアニサキスはその場でエタノール固定し、記念品として参加者に配布した。

4) 閉館後の貸切解説会の開催

①主催：下目黒五丁目自治会　共催：目黒原町会（令和6年7月26～27日、8月3～4日）

②主催：JR東海ツアーズ（令和6年8月17～18日、24～25日）

③主催：小規模ミュージアムネットワーク（令和6年9月14日）

①の解説会は当年度が初となる。「目黒寄生虫館ナイトツアー」と題し、東京都の「令和6年度地域の底力発展助成」の対象事業として行われた。親子連れを対象とした解説会で、地域連携の取り組みの一環である。計4回の開催で合計109名が参加した。②の「EX旅先予約」は前年度に引き続き依頼を受けたもので、4日間で53名が参加した。③は東京農工大学科学博物館で9月13日から2日間にわたり行われた「第13回小さいとこサミット in 東京」のエクスカーションとして開催されたもので、18名が参加した。いずれも自由見学時間を含め1時間15分程度のプログラムである。はじめに倉持館長が展示内容を解説して館内を回り、非公開エリアである収蔵庫の解説は巖城研究室長が担当した。半数ずつ交代して収蔵庫を見学するので、その間に自由な質問時間を設けるなど、来観者とのコミュニケーションを深めた。

5)「文化・教育週間」記念事業

毎年11月1～7日は文部科学省の実施する「文化・教育週間」である。「国際博物館の日」同様、文化庁からの呼びかけに応じて初となる冠イベントを開催した。令和6年11月2～4日の3日間を、午後6時までの延長開館とした。延長時間中は館長と研究職員が展示室に滞在して来観者からの質問を受け付けるなど、気軽なコミュニケーションがとれるような時間をつくった。

6) 公式YouTubeチャンネルの更新

特別展「寄生虫の超能力」の解説動画を製作したほか、ミニ特別展「生体展示 ロイコクロリジウムの幼虫」で展示されたオカモノアラガイの様子を公開した。

B. 講演会・トークイベント依頼の受け入れ

職員による講演等の依頼があった場合には、可能な範囲で受け入れている。寄生虫学に対する関心や理解がより広くの世代に深まることが期待される。近年ではオンライン配信やアーカイブ配信の機会も増え、場所や時間を問わず視聴できる機会が増えた。さらに、地域連携を積極的に推進し、目黒のまちづくりに貢献している。当年度の依頼は以下の通りである。

令和6年4月13日	日本貝類学会令和6年度大会 公開講演会「貝に寄生する、貝が寄生する」 （髙野 剛史）
令和6年6月9日	不動プロボノネットワーク・下目黒五丁目自治会　まちまるごと下五キャンパスプロジェクト「子どもも大人も一緒に学ぼう社会課題とSDGs」 （倉持 利明）
令和6年8月24日	EASE・（一社）めぐもり「自由研究ゼミー世にも不思議な、寄生虫の世界ー」 （倉持 利明）
令和6年8月29日	標津町 地域HACCP推進委員会 食品衛生研究会「食品衛生のための寄生虫リスク管理」 （倉持 利明）
令和6年9月20日	千葉大学理学部生物学科公開セミナー「寄生性腹足類の進化過程－希少種だらけの分類群に挑む」 （髙野 剛史）
令和7年1月11日	第24回日本分類学会連合公開シンポジウム　自然の記録を未来へ、生物標

本の採集・作製・保管の多様性「寄生生物の調査と保管：分類群が異なる宿主標本との紐づけ」
（髙野 剛史）

4. 博物館学芸員実習生の受け入れ

目黒寄生虫館は博物館法第2条に定義される登録博物館である。博物館法施行規則第2条に基づき、博物館学芸員資格取得のための実習生を受け入れている。当年度は初の試みとして、対面かつ8名を一斉に受け入れた。オリエンテーションと蔵書整理に続き、3日目は「仁吉3D」の製作に携わった（一社）路上博物館の森 健人氏のアトリエに集合して博物館資料のDX化に関する講習を行った。また、サイエンスコミュニケーター講座では、研究員の専門分野の説明をグループ別に聞いて内容を相互に解説し合った。当年度は各大学から1名ずつ、以下の8校の学生が参加した（順不同）。

日本大学　明治大学　多摩美術大学　岩手大学　東京農業大学　桜美林大学　武蔵野美術大学
女子美術大学

Ⅲ．寄生虫学への理解を深める資料の刊行・製作事業

1. 刊行物の製作と頒布

定期刊行物「むしはむしでもはらのむし通信」（B5版 カラー16ページ）は、令和6年12月25日に第204号を発行した。当年度は（公財）サントリー文化財団の助成を受け、価格を据え置き8ページ増やした。巻頭特集は10月に開催された市民公開講座「顧みられない熱帯病（NTDs）の対策・制圧において人文学はなにができるか？」の内容を記録に残したもので、講座の登壇者である4名の研究者に加え、助成事業の研究グループ代表である菊池美幸博士（立教大学助教）が寄稿した。その他は、髙野研究員によるバンコクの国際学会参加報告をはじめ、各種の特別展や標本寄贈の話題など、職員が分担して執筆した。初参加のイベントが多かった当年度は、記事内容を取捨選択するほど充実したボリュームとなった。発行部数600部のうち約250部を関係機関・博物館等に送付し、72部を一般に向けて有償頒布した。198号からのバックナンバーを含めた総頒布数は350部であった。完売から2年が過ぎた197号については、3月より公式サイトでPDFファイルの無償公開を始めた。

展示ガイドブック（B5版 カラー16ページ）の年間頒布数は1,017部で、内訳は和文版892部、英文版が125部であった。

これまで刊行物にはISSN（国際標準逐次刊行物番号）を付与していなかったが、国立国会図書館を通じて、海外の図書館から「はらのむし通信」のISSNの付与要請があったと伝えられた。これを機に、かつて発行してきた「目黒寄生虫館月報」「目黒寄生虫館ニュース」の冊子体と、Webサイト上で読めるPDFファイル（オンラインジャーナル）の計6種類のISSNを取得した。冊子体では204号より、表紙右上に番号（2759-5595）を記載している。

2. 教育用標本の頒布

当法人では、医学系大学や教育機関等を対象に寄生虫標本を頒布している。これらは講義や実習を通じて、寄生虫学を学ぶ多数の学生に活用されている。日本寄生虫学会の「寄生虫標本作成支援事業」により、複数の研究機関から標本を受領した。数に限りはあるものの一時的に標本の種類が

増えたことで、前年度と比較して依頼件数は大幅に増加した。当該リストは公式サイト内で公開し、FAXやメール等にて注文を受け付けている。当年度は50機関から68件の依頼を受けた。頒布数は、寄生虫卵液浸標本196本、スライド標本447枚であった。

Ⅳ. 目黒寄生虫館ミュージアムショップの運営事業

2階展示室のミュージアムショップにて、前述の刊行物の販売と寄生虫学関連書籍・オリジナルグッズの委託販売を継続した。前述の第83回日本寄生虫学会東日本支部大会・第75回日本衛生動物学会東日本支部大会合同大会では、市民公開講座が開かれる会場前にグッズの展示コーナーを設置した。特設チラシを作成し、QRコードでオンラインショップに誘導するなどして参加者への広報に務めた。また、大阪市立自然史博物館の特別展「貝に沼る−日本の貝類学研究300年史−」に合わせて、寄生巻貝マグカップをはじめとした関連グッズの委託販売を行った。その際、隣接してPRポスターを掲示してもらうことで、京阪地区の来観者に向けて博物館の周知を図った。

前年度製作した70周年記念Tシャツは期中に完売した。小物類は原価高騰を受けてボールペンを終売とした一方、かねてより要望の多かったアクセサリーを2種製作した。いずれもフタゴムシをモチーフとしたオープンリングとネックレスで、男女を問わず好評を博している。また、製作業者を替えたタイミングで、これまでの封入ストラップを3種のキーホルダーにリニューアルした。当年度はアニサキスとミヤイリガイの2種で、ニベリン条虫は現在の在庫が完売次第切り替える。

書籍類の販売冊数は年間で1,872冊であった。期中には4種が増え、期末時点で29種類になった。中でも、「感染症でまなぶ日本と世界の歴史（清水書院）」は、飯島 渉理事が編著者で、倉持館長が「土壌伝播蠕虫感染症」の医学パートを執筆している。さらに「地方病を語り継ごう（昭和町教育委員会）」は、昭和町風土伝承館杉浦醫院が製作したもので、一般書店では流通がないところを特別に取り扱えるようになった。

クレジットカードや電子マネーなどのキャッシュレス決済は支払額全体の52％で、前年度から7%増加して初めて現金決済を上回った。最終的な売上高は、従来の水準を大幅に上回った前年度をさらに超える最高額に達した。インバウンド需要は年々高まる一方で、英会話や英文スリップの提供は必須となった。また、聴覚障がいの方に向けた筆談具の用意や接客用手話の習得など、様々な来観者に向けたショップ対応が今後も求められる。

その他実施事項等

Ⅰ. 理事会・評議員会等の開催

1. 令和6年度第1回定時理事会

開催日時　令和6年6月2日（日）午後1～3時
開催場所　目黒寄生虫館6階 生涯学習室
出席理事数　6名（総数8名）　出席監事数　2名（総数2名）
報告事項　1. 理事長・常務理事による職務の執行状況の報告

2. 競争的研究費の不正防止に関する令和5年度の実施状況の報告

審議事項　下案を審議し、可決承認した。

第1号議案　公益財団法人目黒寄生虫館 令和5年度事業報告書案の承認の件

第2号議案　公益財団法人目黒寄生虫館 令和5年度計算書類等の承認の件

第3号議案　内閣府への定期提出書類の承認の件

第4号議案　特定費用準備資金の再繰入の承認の件

第5号議案　定時評議員会の日時及び目的である事項等の件

2. 令和6年度第1回定時評議員会

開催日時　令和6年6月23日（日）午後1～3時

開催場所　目黒寄生虫館6階 生涯学習室

出席評議員数　5名（総数7名）出席監事数　2名（総数2名）出席理事　3名（報告事項の説明）

報告事項　理事長・常務理事による職務の執行状況の報告および第1回定時理事会の開催報告

審議事項　下案を審議し、可決承認した。

第1号議案　公益財団法人目黒寄生虫館 令和5年度事業報告書案の承認の件

第2号議案　公益財団法人目黒寄生虫館 令和5年度計算書類等の承認の件

第3号議案　理事の任期満了に伴う選任の件

第4号議案　監事の任期満了に伴う選任の件

3. 令和6年度第1回臨時理事会（みなし決議）

開催があったものとみなされた日　令和6年6月23日（日）

決議があったものとみなされた内容

第1号議案　理事長および常務理事の任期満了に伴う選任の件

4. 令和6年度第2回定時理事会

開催日時　令和7年3月9日（日）午後1～3時

開催場所　目黒寄生虫館6階 生涯学習室

出席理事数　8名（総数8名）　出席監事数　1名（総数2名）

報告事項　理事長・常務理事による職務の執行状況の報告および競争的研究費の不正防止に関する報告

審議事項　下案を審議し、可決承認した。

第1号議案　公益財団法人目黒寄生虫館令和7年度事業計画書案及び収支予算書案（「資金調達及び設備投資の見込み」を記載した書類を含む）の承認の件

Ⅱ. 省庁および自治体等への届出事項、他

令和6年		
4月10日	「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」に基づく取組状況に係るチェックリスト	文部科学省（研究公正推進室）
5月4日	博物館等運営状況定期報告書	東京都教育庁
5月28日	法人税申告書	目黒税務署

5月28日	法人都道府県民税確定申告	渋谷都税事務所
5月29日	令和5年度競争的資金に係る間接経費執行実績報告書	文部科学省
6月8日	体制整備等自己評価チェックリスト	文部科学省
6月26日	令和5年度事業報告書・収支決算書等の届出書	内閣府
7月10日	理事及び代表理事の変更（再任）の届出書	内閣府
12月14日	税額控除に係る証明申請	内閣府

令和7年

3月4日	休日労働・時間外労働に関する協定書	品川労働基準監督署
3月12日	令和7年度事業計画書および収支予算書の届出	内閣府
	その他、各種調査書類等への回答	内閣府・文部科学省等

Ⅲ. その他の事項

1. ビル管理

築年数30年以上経過した法人ビルは、毎年少しずつでも補修しなければならない。中でも外階段は大通りに面しており、蛍光灯の交換は高層階にいくほど危険を伴う。2年以内に蛍光灯自体が製造終了となることから、このたびLED照明への交換工事を実施した。

2. 公式ウェブサイト

公式ウェブサイト（https://www.kiseichu.org/）では事業内容の紹介や開館案内を随時更新し、情報公開のページでは遅滞なく電子公告を行った。資料提供等に応じた他館へのリンクや、寄付金累計額の経過報告、公式YouTubeチャンネルや「仁吉3D」への誘導、研究員ブログなどこまめな更新を心掛けた。ブログでは講演会やアウトリーチ活動の模様、来館した外部研究者の紹介など様々な活動を報告している。当年度の閲覧数は252,700人で、1日平均692人であった。

3. 職員研修

当年度に職員が参加した研修等の実績は以下の通りである。

1. 倉持 利明

令和6年

6月22日：第43回自然史標本データ整備事業による標本情報の発信に関する研究会（S-Net研究会）（主催：国立科学博物館）

7月3日：令和6年度全国博物館長会議（主催：文化庁、共催：（公財）日本博物館協会）

7月4日：令和6年度第1回全国科学博物館協議会総会（主催：全国科学博物館協議会）

12月12日：生物多様性条約第16回締約国会議（COP16）報告会-DSIを中心に-（主催：国立遺伝学研究所学術対策チーム）

12月13日：公開フォーラム「教員のための博物館の日2024」事例報告会（主催：国立科学博物館、共催：（公財）日本博物館協会）

令和7年

2月12日：博物館・美術館ネットワーク会議（主催：東京都生活文化スポーツ局文化振興部）

2月18日：博物館新登録制度：疑問や課題の解決相談会～登録申請意向アンケートから登録制度の拡充と博物館の充実を考える！～（主催：(公財) 日本博物館協会）
2月22～23日：展示学講座「展示のリノベーションを考える」（主催：日本展示学会、共催：東京国立博物館・国立科学博物館）
3月4日：Innovate Museum説明会（主催：文化庁）
3月5～7日：令和6年度ミュージアム・トップマネジメント研修（主催：文化庁、国立教育政策研究所）
3月21日：令和6年度研究協議会「収蔵庫問題について考える」（主催：(公財) 日本博物館協会）
3月27～8日：令和6年度文化をつなぐミュージアム研修（主催：文化庁）

2. 巖城 隆
令和7年
2月23日：第44回自然史標本データ整備事業による標本情報の発信に関する研究会―自　然史博物館の画像公開を考える：実務とシステムの両面から―（主催：国立科学博物館、共催：大阪市立自然史博物館）
3月27～28日：令和6年度文化をつなぐミュージアム研修（主催：文化庁）

3. 亀谷 誓一
令和6年
12月3～6日：令和6年度ミュージアム・パブリックリレーションズ研修（主催：文化庁、国立アイヌ民族博物館）
令和7年
2月18日：博物館新登録制度：疑問や課題の解決相談会～登録申請意向アンケートから登録制度の拡充と博物館の充実を考える！～（主催：(公財) 日本博物館協会）

上記に加え、職員全員が、令和7年3月16～22日までの間にYouTube『[博物館]心のバリアフリー研修動画』及び各種障がいのある方への研修動画（いずれも観光庁チャンネル）を各自で視聴・自修し、バリアフリーへの理解を深めた。

4. 商標権の取得
博物館としての価値をさらに高め、信頼のおける施設となるよう前期末に2つの商標権を出願した。滞りなく審査は受理され、令和6年10月に館名『目黒寄生虫館』（登録商標第6850043号）と『Meguro Parasitological Museumロゴマーク』（登録商標第6853555号）が特許庁に登録された。

5. 税額控除の証明申請
「3,000円を超える寄付者が5年間の平均で年間100人を超える法人」として、令和7年1月27日付で税額控除の証明を受けた。確定申告の際に一般的に所得控除よりも控除額が高くなるとされ、より寄付を受けやすくなることから、今後の支援者の増加が期待される。

6. 雑収入
博物館に隣接する自動販売機について、雑収入を計上した。

附属明細書

令和6年度事業報告には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第34条第3項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成しない。